B 8　　自己の身体形態に対する意識について（その2）

大妻女大　家政学研究科　　小山田桃子

目的　被服の着用には、自己を理想とする身体像に近づけるという効果があり、前報ではその基本的研究段階として、自己の「生体計測値、理想値」と「身体形態に対する意識」との関係を検討した。本報では、更に後者についてその構造を調べ、生体計測値の分析と比較し、被服着用の意義についての考察を試みた。

方法　対象：一般女子学生251 名（20～22歳）　資料：前法と同一の生体計測値およびアンケート調査（①自己の身体各部位に対する意識（例　上腕部：細い―太い）の31項目、②自己の身体各部位の満足度の25項目を用いた。）　分析：①および②について主成分分析を行い、各々の構造を調べ、更に生体計測値の主成分分析結果と比較した。また、②において全身の満足度を目的変数とする重回帰分析を行い、全身の満足度への身体各部位の満足度の影響のし方を調べた。

結果　1.身体各部位に対する意識の主成分分析では、第1主成分に身体全体にわたる太さの成分、第2主成分に総合的な身体の高さ・長さの成分、第3主成分に体幹の太さの成分が抽出された。（累積寄与率52.5%）　2.身体各部位の満足度の主成分分析では、第1主成分に身体全体にわたる満足度の成分、第2主成分に体幹・体肢とも下半身の満足度の成分、第3主成分に腹部の満足度の成分、第4主成分に頭・顔部の満足度の成分が抽出された。（累積寄与率50.8%）　3.満足度の重回帰分析では、身長の満足度が著しく高く全身の満足度を説明した。（R＝0.785）　以上、自己の身体各部位に対する意識および満足度の構造は、生体計測値群の構造とは異なる様相を示すことがわかった。従って、理想とする身体像に自己を近づけるという被服着用の効果を考えるうえで、被服は現実の自己の身体形態とそれに対する意識とのギャップの中に存在しながら、その複雑かつ重要な役割を期待されていることが考えられる。